

## 西遊寺の環境

西井 綾乃

### (1)橋本の立地と由来

調査地西遊寺(写真1)が所在する八幡市の橋本は、男山の鳩峯の西麓、淀川の東岸に面し、町並みの中央を京街道が通る。京街道(大坂街道)は、京の中心部から淀を経て、淀川左岸を大坂京橋へとつづく街道であるが、近世では淀大橋を渡り美豆村から八幡科手を経て、橋本北ノ町、同中ノ町、同小金川を通り、河内の楠葉へと続く。橋本の地名は、淀川対岸の山崎との間に架した橋のたもとにできた集落であったことに由来するといわれ、その橋の流出後も渡船場として栄えたという(1)。



写真1 京阪橋本駅と西遊寺

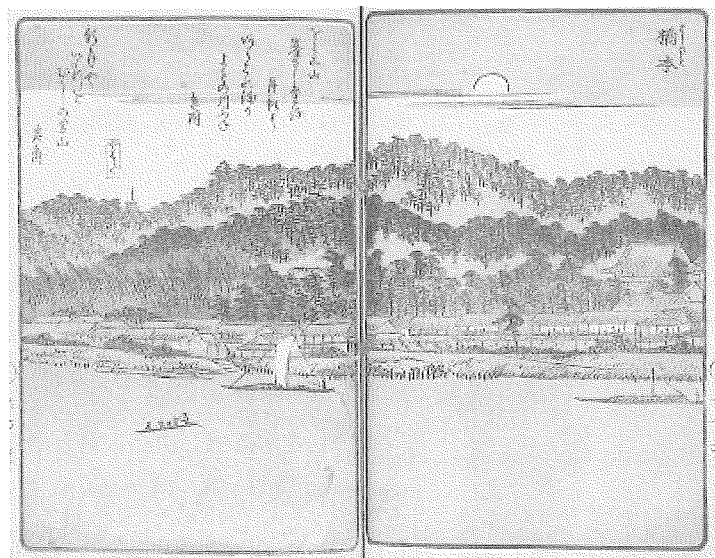


写真2 淀川から見た橋本を描いた絵図(『淀川兩岸一覽』)

### (2)名所案内記に見る橋本

文久年間(1861~1863年)に刊行された名所案内記『淀川兩岸一覽』(2)の中で、橋本は「大坂街道の駅にて人家の地十一丁あり、茶店・旅舎多くいたって繁花なり、八幡へ参詣の人この所より上りてよし」と、石清水八幡宮への参詣の起点として紹介されている。茶店や旅籠が立ち並び、街道を行き交う人々で賑わっていたことがうかがえる(写真2)。

また、橋本渡口のことは「淀川を山崎とわたす」と記述されている。

その渡った先の山崎は「茶店・旅舎多く有て賑わし、此所参詣所しばしばあり」として、「大山崎天王社」や天正10年(1582)の山崎合戦の「古戦場」が紹介されている。橋本の渡し船で結ばれた淀川兩岸は共に名所が多く存在し、たくさんの方が船で行き来する観光地であったと考えられる。

### (3)道標から見た橋本

また、淀川兩岸を結ぶ橋本の渡しは、昭和30年代に途絶えるまで重要な交通手段であったことが、道標からもうかがえる。船着場へ至る栄橋のたもとに立つ明治2年(1869)の道標には、「柳谷わたし場」「山ざき あたご わたし場」「大坂下り舟 津の国そうじ寺 わたし場」と、京都・大坂への渡し船について記されている。また、昭和2年(1927年)に建てられた道標(写真3)にも、近くにある「橋本渡船場」や、淀川対岸にある「山崎停車所」「柳谷観音」への案内が記されている。「津の国そうじ寺」は、中納言藤原山蔭によって開かれた真言宗の総持寺(大阪府茨木市総持寺)のことで、寛平2年(890)2月4日に伽藍の落成法要が行われたと伝えられている。また、柳谷観音(京都府長岡京市浄土谷)は大同元年(806)京都清水寺開創の延鎮僧都によって開山されという。このように、由緒ある寺院への案内が記された道標があることから、橋本は参詣と交通の拠点であったことがうかがえる。



写真3 橋本の渡しへの道標

### (4)江戸時代の遊興と橋本

江戸時代、街道網の整備が進む一方で、庶民の移動は制限されていた。しかし、「伊勢参り」をはじめとした寺社参詣を名目とした旅は許されていて、文政13年(1830)には約3カ月の間に427万人の伊勢参宮者があったと記録される(3)など、信仰の旅に出る人は少なくなかった。また、参詣が目的としつつも、次第に名所を巡る物見遊山を兼ねた娯楽的要素の多い旅行となっていた。

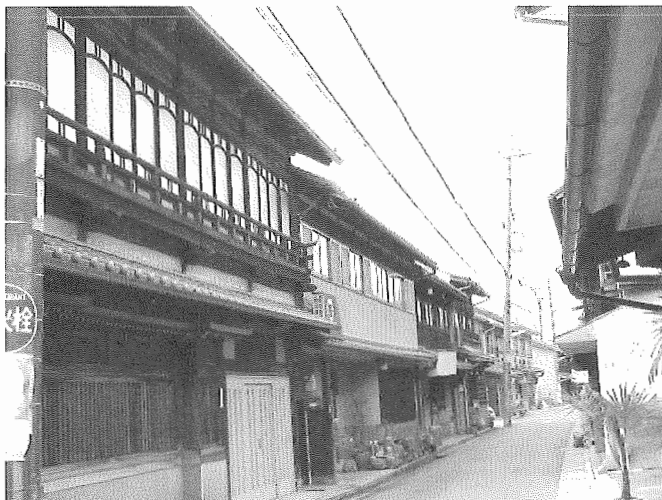


写真4 旧遊郭の建物(左手前)と町並み

そして、遊郭での遊興も娯楽のひとつであったが、橋本にも遊郭が存在した。17世紀の中頃には既に、遊女をおく家が20軒程あったことがわかっている。それらがしばしば盗人宿となり、風紀や治安が乱れることを警戒して、遊女をおくことは厳禁されていた。(4)しかし、廃絶されることはなかったと思われる。

時代は下り、昭和33年(1958)に遊郭は廃止されたが、現在もなお、昭和初期に建てられた遊郭の建物が残って

いる（写真4）。2階の装飾や1階部分の格子に様々な意匠が凝らされていて、華やかな外見を持つ町家は、橋本の町並みに独特の華を添えている。

橋本には淀川兩岸を結ぶ渡船場があり、なおかつ京と大坂とを結ぶ京街道にも接続していた。このことから、橋本は交通の要衝として、また参詣と物見遊山の拠点として、ながきに渡り賑わっていたと考えられる。

#### (5)西遊寺について

その京街道を望む山裾の小高い場所、京阪電車橋本駅前に西遊寺がある。その開基は増上寺の第十世住職感誉上人であるという。感誉上人は、天正元年（1573）宗祖法然上人八幡宮参籠地を記念して、当地に一寺を創立した。そして、西国歴遊を寺号とし、普現山西遊寺と称した。その後、徳川家康出陣の際に金襴の袈裟を賜り、その庇護を受けたという。慶長5年（1600）朱印地5石5斗を所領とし、八幡浄土宗三十六ヶ寺のひとつとなった(5)。また、明治11年（1878）には神仏分離令により、狩尾社にあった帝釈天像（八幡市指定文化財）が西遊寺の境内に移転され、現在では、観音像・地藏像とともに地藏堂に安置されている。

#### (6)橋本の寺

石清水八幡宮とその付近に関する史料としては、石清水八幡宮の宮大工であった藤原尚次が嘉永元年（1848）に著した「男山考古録」が挙げられる。そこに詳細な記録が残る橋本の由緒ある寺としては、橋本寺と常德寺（写真5）がある。

「男山考古録」によると、橋本寺は、嘉永元年時点では絶えているが、町道の南側に存在した法華宗の寺であったという。そして、これは慶長年間（1596～1614）に建てられた町内社士の橋本氏の氏寺であったが、寛保3年（1743）の記録では既に橋本寺跡となっているとも記述されている(6)。

また、常德寺は曹洞宗の禅寺で、始めは八幡山の山下にあった。足利義尚の陣僧・春庭座元が開基と伝えられ、当時は五家禅刹随一を誇ったという。江戸時代の初期に刊行された山城国の地誌である「雍州府志」には、橋本村の東北にあるとされる(7)。また、京都府立総合資料館所蔵の18世紀の絵図「石清水八幡宮全図」(8)にも、北隣の科手から橋本に入る東口、橋本樋上の少し西に、慈眼院と並ぶ位置に常德寺の名が見える。その後、一峯和尚が住職の時に西遊寺の西に移された(9)というが、実際、文化11年（1814）の絵図には、西遊寺の西に常德寺が記されている。そして、文化10年正月に焼失したとの記



写真5 「妙見宮旧常德寺」の碑



写真6 「本祥寺」の碑

録があることから、焼失した後に西遊寺の西に移されたのではないかと考えられる。

また、常德寺は豊臣秀吉の帰依を受けて、下奈良に25石の所領を賜ったという。そして、秀吉が寺を訪れて茶を所望したところ、白湯を進上したので「湯澤山茶くれん寺」と言われ、以後、それを寺号としたという伝説が残っている(10)。

これらの寺の他にも、橋本には今も浄土真宗の正満寺があり、西遊寺の北隣には日蓮宗の本祥寺(写真6)があった。浄土三十六ヶ寺組や禅宗十ヶ寺組・禅宗五ヶ寺など、多数の寺が存在していた石清水八幡宮山下の一角として、地域内に多数の寺があったことが、橋本の特徴であると考えられる。

#### 【注】

1. 『日本歴史大系 26 京都府の地名』平凡社、1981年
2. 早稲田大学図書館 古典籍総合データベース  
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> (2012年10月9日時点)
3. 「御蔭参宮文政神異記 上」、神宮庁『神宮参拝記大成』、西濃印刷株式会社岐阜支店、1937年
4. 八幡市誌編纂委員協議会『八幡市誌 第2巻』八幡市、1980年
5. 『石清水八幡宮史料叢書一 男山考古録全』石清水八幡宮社務所、1960年
6. 前掲5
7. 前掲5
8. 京都府立総合資料館 京の記憶ライブラリ  
<http://kyoto-shiryokan.jp/kyoto-memory/index.php> (2012年10月9日時点)
9. 前掲5
10. 前掲5

## 表紙解説

	1 2 3
5	4
(裏)	(表)

1. 西遊寺古文書調査の様子
2. 念佛寺門前（撮影：中井正寛）
3. 念佛寺古文書調査の様子
4. 安居橋から男山を望む（撮影：中井正寛）
5. 八幡清水井の路地田町（たまち）（撮影：中井正寛）



京都府立大学文化遺産叢書 第10集

### 石清水門前寺院・南山城地域の古文書

—京都府歴史資料の調査—

編集 竹中友里代（京都府立大学文学部特任講師）

東昇（京都府立大学文学部 准教授）

発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

京都教区八幡組浄土宗青年会

発行日 2016年3月30日

印刷 双林株式会社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル

---